

創業当時の柴田音吉洋服店。初代音吉(左端)は、明治天皇陛下のお召服を謁見しただけで仕立てたという。



moment 26

1869

bespoke tailoring

英国人カペル氏が居留地にテーラーを開く



顧客のひとり、伊藤博文公が実際に着用していたフロックコート。今日に至るまで、当店に保管されている。

洋装の将来を見ぬいた先見性

柴田音吉洋服店

shibata otokichi yohfukuten

「1869（明治2）年、居留地に英国人カペル氏がテーラーを開きました。『これからは洋服の時代がくる』と考えた初代柴田音吉は、カペル氏のもとで修業を重ね、1883（明治16）年、日本人初のテーラーとして元町3丁目に開業したんです」

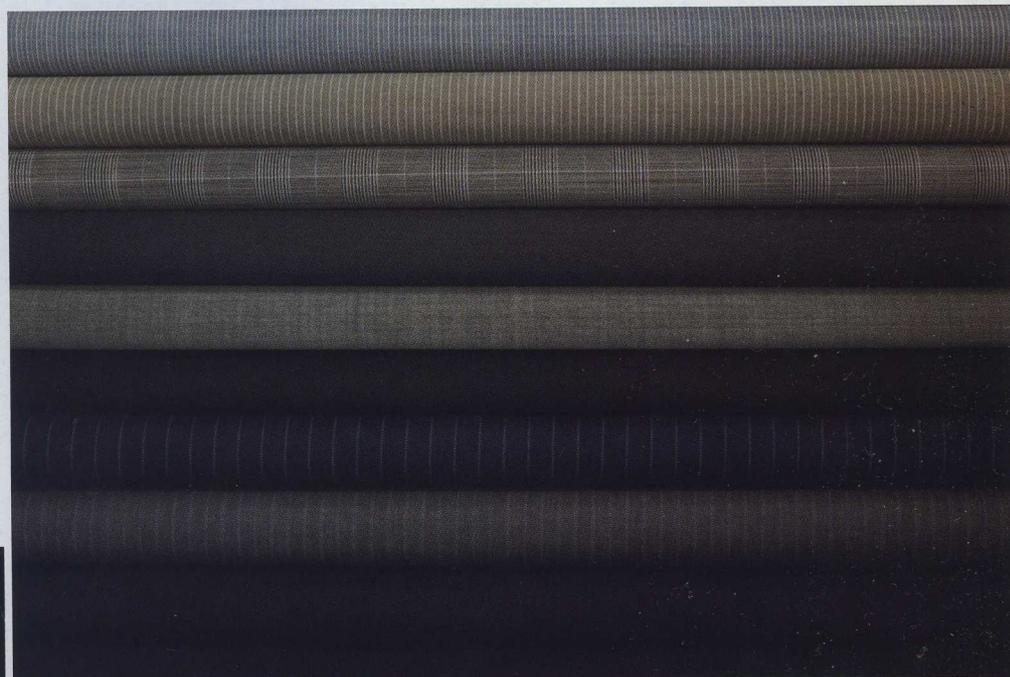
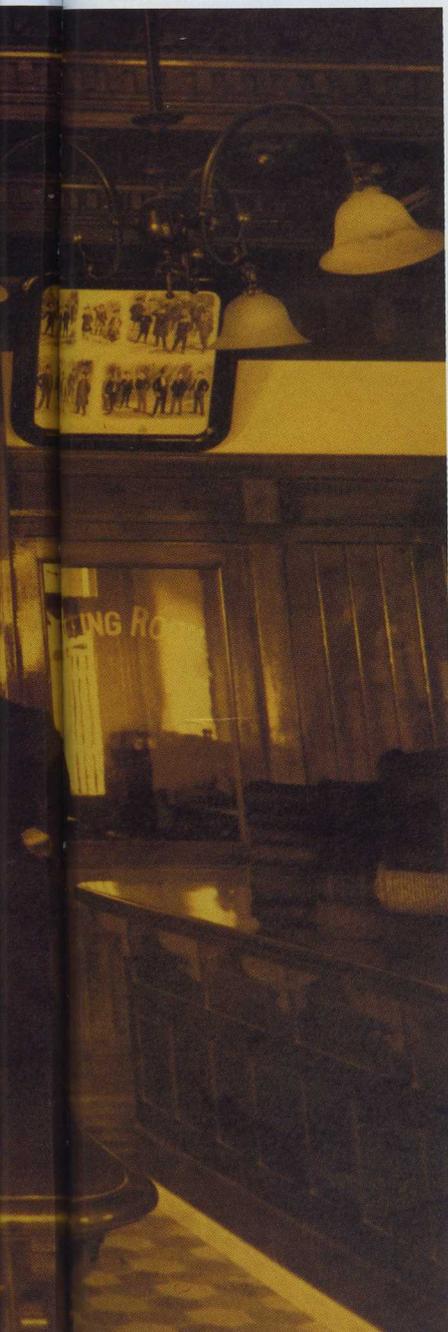
と、柴田音吉洋服店の4代目音吉さん。居留地ばかりか、街にも西洋人の姿は珍しくない。文明開化の真っただ中に、「おっ、いいじゃないか」と神戸の紳士たちが洋装を受け入れたことは、想像に難くない。

極上の生地をたっぷり使った丁寧な仕立てと、ゆったりとした着心地が、口コミで伝播する。初代兵庫県知事だった伊藤博文公や、男爵にして関西財閥の重鎮、藤田伝三

郎らも顧客となった。

「テーラーとは本来、bespoke tailor (be spoken tailor) と言うんです。つまりお客さまとの対話を通じて嗜好を聞き、その方の人格と風格を表現する一着をお作りするのが私どもの仕事なのです」(柴田さん)

今なお完全なハンドメイド。スーツなら上は6万針、下は3万針を要して仕上げるという。元町4丁目にある現在の店舗は、サロン風の佇まいだ。神戸マイスターに認定されたチーフカッターをはじめとする職人たちが肅々と作業をしている。大切に保管された数多くの型紙の中には、名を聞けば誰もが知っている著名な実業家の名前が、いくつも混じっていた。



オーダーメイドスーツの場合、採寸から仕上がりまで約1カ月。ほとんどが手縫いだ。よいスーツは、パターン（型紙）と裁断でほぼ決まると言われる。同店のチーフカッター、稲澤治徳さんはこの道50余年。型紙に文鎮を載せただけで、すらすらと生地にチョークを入れていく。4代目音吉さん（右下）。

